

大塚保治

学生時代の夏目君

学生時代の夏目君

自分は夏目君の性格や思想なぞを知っている点で、恐らく随一だろうとは信じているが、学生時代の夏目君と云われると、同君の性行を躍如とさせるようなインシデントが記憶に残っていない。そう云うものは却って、大卒卒業後暫らく一緒の家にいた菅虎雄君とか、同級だった狩野亨吉君なぞの方が詳しく知っている筈である。

初めて夏目君と相識したのは、自分が卒業して、大学院にいる時であった。同君は確か自分より二年下だった

と思う。兎に角自分が大学院にいて、寄宿舎にいる時、夏目君も入舎して来た。其頃の文科生は数も少なく、寄宿舎でも二三室を占領しているだけだったから、夏目君とは或は同室になった事もあり、又向いの室に居た事もある。

其時分話がよく合ったのは覚えてはいるが、果してどんな問題を喋り合ったものかは、毫も記憶にない。唯同君の学生時代の態度も、後の夏目君と異りがなく、所謂低徊趣味的と云おうか、俳味に満ちていたと云ってもよい。其頃の文科は、割合に哲学科目が多かったが、同君はそれ

に對し、殊に成績がよかつた。一般に勉強すると云う程勉強したとも覚えていないが、よく出来たのは確かである。

俳句は学生時代から子規と相知つて、作っていたらしかつた。大学にいる時分日本俳句に出していたとか云う話を後で聞いた。不折と知つたのも其頃の事であろう。

又文章の方面では、早く哲学雑誌の米山君の勧めで、「英国詩人の天地山川に對する感想」や、ウォールト・ホイットマンを論じた論文などを発表した。自分等は当時感服したものであるが、未だ文壇の耳目をひくには至らなかつた。

運動は同窓の阪卷君に勧められて、弓を少しやったと覚えている。その他にはこれぞと云う運動もせず、只散歩にはよく出た。自分なども一緒に出て、色々な事を話したものであるが、途上同君の軽妙な警句や又犀利な觀察に屢々驚かされたと云うだけしか記憶していない。

漢詩は其頃から読んでいた。自分で作ってもいたらしかった。私は夏目君が其頃、どんな場合だったか忘れたが、

魂歸冥冥魄歸泉

只住人間十五年

昨日施僧薰苔上

斷腸猶繫琵琶弦

と云う三体詩にある哭亡妓という詩を、微吟愛唱していたのを今でも覚えていたが、よく高青邱の詩などを見ておった。専門の英文学の方では何が愛読書であつたか、私は知らなかつた。

座禪に興味を持ったのも、其頃からであつて、確か学校を卒業する夏だつたと思う、謙倉で一ヶ月ほど参禪した。学生時代の事と云えば、先ずそんな処である。洋行中の事は前後して英国へ行った土井（林吉）君がよく知っている筈である。倫敦消息などで一斑は知れているが、自分たちにも長い手紙も連名でよこして、詳しく状況を

知らして来たこともある。それは菅君か狩野君の処にあるかも知れない。何でも洋行中激しい神経衰弱に罹って、土井君などが驚いて気狂いになったのではないかと心配したそうである。その間の消息は例の文学論の序に委曲を尽してあるから少しは世にも知れてるだろう。自分はよくは知らない。

私のよく知ったのは、洋行後と云ってもよい。洋行後ずっと続けて親しくして、色々な俗事で相往来もしたが、余りに私人的な事情で発表の限りでないのを遺憾とする。それから猶一言注意して置きたいのは、夏目君の大学

を去った事、及び博士号辞退の件に就て、いろいろ大学側又は官省側に対する事情でもあったように推測する向もあるが、私はそうは考えない。これは既に朝日の記者にも話したが、同君の徹底を欲する態度が、到底講義と創作の両立すべからざるを知ったからに止まるのである。同君は随分講義には骨を折られたから、講義をするとなると、同君の気性としていい加減にして置けず、従って時間をとられるので、創作に油が乗り出したからには、断然教職を去ったのであろう。博士号辞退とても、一旦こうして野に下った以上、従来 of 経歴から押して行

けば当然同君の辞退するのが当然で、仮りに同君の位置に吾々がいるとしても、そうしたであろう。又博士会の方でも、推薦をするのに当人の意志を問い合せる必要を認めなかったから、あんな事になっただけで、どちらも正しいと見るのが当然だと思う。

この二つは夏目君の生涯でも、最も公衆的な事件で、誤解があると困るから、一言附けくわえて置くのである。

(談——新小説第二十二年第二号より)

日本文学電子図書館

学生時代の夏目君

著 者：大塚保治

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

日本文学電子図書館